山と博物館

第46巻 第11号 2000年11月25日 市立大町山岳博物館

「氷のモザイク」 撮影 山本 携挙

冬の訪れ

山本携挙

岳の紅葉は、今年は紅が鮮やかだったが、里は思いの外で、枯葉の茶色が目立ちくすんで映った。

それでも県外車から降り立った、オバタリアン達が歓声をあげ、湖のほとりに高級カメラに三脚をかまえて、今はやりのネイチャーフォトを狙ってシャッターを切っていた。

湖岸の葦の穂を大きくゆすって、冷たい風が吹く頃になると、カメラウーマン達の姿も見えなくなり、いよいよ冬の到来となる。

小雪のやんだ次の朝、湖の水辺を歩くと、雪の作ったいろんなオブジェに出逢うことができる。薄氷上の模様であったり、枯枝や草に波がたわむれた形が、そのまま凍りついていたりする。そんなものを形をえらび、光と影を考えながら構図し、ファインダーに収めてまわる。ふと頭をもたげると、湖面に湧き立つような靄が静寂と幽玄の世界を拡げている。

そんな時、わたしは小さな秋ならぬ、小さな冬を見つけるのである。

（大町山岳博物館協議会委員）

ニホンカモシカの呼び名と語源
―百六十三種の分類―（完結編）④

北村嘉寳

（二）黒系統

124、スス

体毛が煤色（黒色）をしたカモシカをいう隠語。鹿の多いところでは鹿をスス、カモシカの多いところではカモシカをススと呼ぶ。このほかシシが訛ったとする説やアオススの上略称だとする説などがある。岩手〔岩手〕・新潟〔岩船〕

㉑田中喜多見『山村民俗誌』（一九三三年）

125、ケグロ

漢字表記は毛黒で、毛の黒いカモシカをいう隠語。大分～宮崎〔祖母山・傾山〕

文献㊾に同じ。

126、クロシシ

黒宍、つまり毛色のクロと宍とを組合せた隠語。徳島〔剣山～大歩危〕・大分〔大野・南海部〕・大分～宮崎〔傾山〕

㉒山口迪『九州・沖縄の生きものたち第3集』（西日本新聞社、一九七七年）

127、クロンボ（クロンボウ）

クロは体色の黒、ボ（ボウ）は罵る意味の接尾語で、クロい奴という隠語（蔑称）。長野〔下伊那・茅野・諏訪・岡谷〕・三重〔亀山・三重〕・大分～宮崎〔大崩山・傾山〕

文献㊸に同じ。

（三）白系統

128、シラシシ

白色系の体毛をもつカモシカをいい、白宍が訛った方言。新潟

㉓橘茂世『北越奇談』（一八一二年）

129、シロンコ

冬になると、白毛が多くなることから白の鹿（鹿がコに訛ったもの）といい、時と共にシロンコに訛った隠語。福島〔耶麻〕

山口迪氏の書簡による。

130、シンシロ

尻毛が白いことから尻白、転じてシンシロにした隠語。宮崎〔西臼杵〕

山口迪氏の書簡による。

131、シロッコ

シロンコと同義語で、白鹿がシロッコにあんった隠語。白系統の呼称は、すべて愛称。新潟〔南蒲原〕

㉔千葉彬司『カモシカ日記』（毎日新聞社、一九七二年）

（四）赤系統

132、ショウジョウ

体毛（体色）が赤土色をしたカモシカをいい、猩々（大酒呑み→真赤になるという代名詞）をヒントにした隠語（愛称）。因みに、赤毛皮の呼称でもある。京都〔北桑田・船井〕

松本貞輔氏の書簡（磯部清一郎氏談）による。

十一、体毛系統

133、ケブカ

体毛が長いので毛深と呼んだ隠語。大分～宮崎〔傾山〕

文献㊾に同じ。

134、ツウジ

一才仔の額にある旋毛を呼び名にしたマタギ言葉であるが、地方によってツムゲ、ツムジと呼ぶところもある。山形〔西置賜・南小国〕

㉕伊藤麗子「村の風土記」『全国小・中学校綴方コンクール作品集（2）』（読売新聞社、一九五二年）

135、ツムゲ

ツウジと同義語のマタギ言葉で、分布地域は宮城県白石市であるが、地区によって次のツムジも使われている。

㉖『宮城県史』（一九五六年）

136、ツムジ

福島県南会津郡発行の『桧枝岐村史』（一九三四年）に収録されているマタギ言葉で、当才仔をいう。地域によってはクマの仔の呼び名でもある。宮城〔白石〕・福島〔南会津〕

文献番号㊼とする。

十二、親・仔連れ・牡牝系統

137、オヤシシ

文字どおり親（成獣）のカモシカをいうマタギ言葉である。カモシカの親子区分は三才までを仔（幼獣）、四才以上を親（成獣）としており呼び名の大部分は成獣名になっている。秋田

文献㊼に同じ。

138、サンゴ

受胎しているカモシカをいうマタギ言葉。サンゴはもともと、産仔と書き、人間やその他の動物の腹仔（胎児）をいうが、マタギ達は、産まれる仔が腹にいるという意味で、里言葉を親カモシカに転用したのであろう。岩手〔和賀〕・秋田〔雄勝〕・新潟〔岩船〕

㉘太田雄治『マタギ全』（一九七九年）

139、フタツジカ

仔連れのカモシカをいう方言。富山〔黒部〕

㉙桐沢半六『黒部奥山廻り記録』（一八一〇年）

140、ウジシ

牡をいう隠語。雄ジシから変化したものか、オジシがウジシに訛ったものと考えられる。新潟〔岩船〕

文献㊽に同じ。

141、サッペイ

牝の成獣をいう。語感からはマタギ言葉と思われるが、裏付け資料は今のところ見当らない。ただマタギ達は、女のことをサッペラと呼んでいたので、牝の名付に当って、サッ

ベラの「ラ」を「イ」に代えて、サッペイとしたのであろう。山形〔西置賜〕
文献㊸に同じ。

142、チイジモチ
チィジ（仔）を持っている（連れている）という意で、仔連れのカモシカをいうマタギ言葉である。福島〔南会津〕
⑩楳垣実『日本の忌み言葉』（岩崎美術社、一九七三年）

143、クマン
牝のカモシカをいうマタギ言葉。マタギ達は、女性器のことをクマアナと称しているので、牝の表現としてクマに、接尾語の「ン」をつけてクマンとしたのであろう。福島〔南会津〕
文献㊶に同じ。

144、ハダ（ハンダ）
里言葉で母獣をいうハダをそのまま、カモシカの呼び名に転用したマタギ言葉である。ハンダはハダの訛ったもの。秋田〔仙北〕
⑩武藤鉄城「秋田マタギの語彙」『東北民俗研究2』（東北民俗学会、一九五〇年）及び㊻の文献

十三、仔系統の呼び名

145、ホノコ
一才仔、二才仔は仔一般をいうマタギ言葉。哺育中の仔→哺の仔が語源だとすると、一才仔だけの呼び名となるが、同じ県の中でも地域によっては、仔一般をホノコと呼んでいる所もある。
◎一才仔…青森〔下北〕・秋田〔雄勝・仙北・由利〕
文献は②に同じ。
◎二才仔…岩手〔岩手〕
文献㊽に同じ。
◎仔一般…秋田〔北秋田〕・宮城〔栗原〕
⑩金子総平「秋田マタギ探訪記（3）」『旅と伝説16（9）』（一九四三年）

146、ホノ
一才仔・二才仔または中位の大きさのカモシカをいうマタギ言葉で、三才仔であっても、小型のものは、中位の大きさとしてホノと呼ぶ。ホノコの下略称である。
◎一才仔…青森〔下北〕・秋田〔山本〕
⑩藤里町誌編纂委員会編『藤里町誌』（一九七五年）
◎二才仔…秋田〔由利〕
⑩金子総平「秋田マタギ探訪記（4）」『旅と伝説16（12）』
◎中位の大きさ…秋田〔由利〕
文献㊾に同じ。

147、チチ（チヂ・チイジ）
生れたばかりの幼体や、角の出ない一年未満の仔をいうマタギ言葉で、チチは乳、すなわち乳のみ仔をいう。
一方、チヂはチチが訛ったか、稚児の意かどちらかである。また、チイジは分布地域が異なるがチチと同義語で、チを発音するときに生ずるいわゆる"生み字"の「イ」が、強調されてチイジになったものと考えられる。
◎チチ…新潟〔岩船〕⑩藤木九三ほか『マタギ部落訪問』（一九五六年）
◎チヂ…新潟〔岩船〕
文献㊽に同じ。
◎チイジ…山形〔西置賜〕
文献⑩に同じ。

148、チヅコ
生れたばかりの仔をいう隠語で、乳のみ仔を乳っ仔とし、それがチヅコに転訛したのではないか。山形〔西置賜〕
文献㊸に同じ。

149、トーサイ
漢字表記で当才、つまり生れたばかりの仔（一才仔）をいう方言。長野〔大町〕
文献㊼に同じ。

150、トーゼ
一才仔をいう方言であるが、トーサイ→トーザイ→トーゼと転訛した呼び名と考えられる。長野〔大町〕
文献㊼に同じ。

151、デワッコ
一才仔（生後約七～八ヶ月児）をいう隠語である。隠語は推測であるが、長野県の一部地域では、「イワシシ」や「イワシカ」などの呼び名があるので、デワッコは稚ィワッ仔といっていたのが、デワッコに転訛したのか、あるいは仔は手を焼かせることから手焼ッ仔→テヤッコ→テワッコ→デワッコとして定着したのであろう。因みにカモシカの毛皮をデワと呼んでいるが、語源は不詳。長野〔大町・北安曇〕
文献㊼に同じ。

152、ニセッポ（ニセッポー）
二才の仔をいう方言。二才にポー（奴）を付けて、二才ッポと呼んだのが、ニセィッポ→ニセッポと転訛したのであろう。長野〔大町〕
文献㊼に同じ。

153、サンザイ
文字どおり三才の仔をいう方言。長野〔大町〕・富山〔中新川〕
文献㊼に同じ。

154、サンゼッポ（サンゼッポー）
三才の仔をいう方言で、三才に接尾語の「ポ」をつけ、サンザイッポとしたのが、サンゼッポに転訛したのであろう。長野〔大町〕
文献㊼に同じ。

155、イデコ
二才仔をいうマタギ言葉で、マタギ達の住む里では、人間の子供をイデと呼んでいるので、カモシカの仔を区別するため、イデに指小辞の「コ」をつけて、イデコと呼んだもの。クマの仔もイデという。新潟〔北蒲原〕
⑩金子総平「越後赤谷伝承民俗雑記」『旅と伝説15（6）』（三元社、一九四二年）

156、イリコ
仔一般をいうマタギ言葉でイリコと区別するため、「デ」を「リ」に代えてイリコにしたものと考えられる。新潟〔北蒲原〕
文献㊸に同じ。

（三重県在住）

本文に関する問合せ先
〒五一九-三四〇三　三重県北牟婁郡海山町上里三七六
電話〇五九七三―六―一三二

ウェストンと『日本アルプス』の誕生

田畑真一

日本アルプスの父と賛えられる英国人宣教師ウェストン（一八六一～一九四〇年）。明治時代などにあって、日本アルプスの山々を中心にして、探検的とも思える数多くの登山を行った。また、一八九六（明治二十九）年、ロンドンで『日本アルプス―登山と探検』を発行、日本アルプスの存在を世界に向けて紹介し、わが国にスポーツとしての登山を広めた。

なお、本年（平成十二年）は、ウェストンが日本で初登山を行ってから、奇しくも百十周年にあたる。それは明治二十三年十一月、九州の祖母山への登山だった。だから、私は「ウェストン百十年」と呼びたい。

昭和八年十二月、ウェストンの『日本アルプス―登山と探検』（岡村精一訳、梓書房）が世に出た。初の邦訳書だ。

日本山岳会の「会報」二十六号（昭和八年五月）には広告が載り、「ウェストン日本アルプス　探検と登山　近刊」とある。定価は未記入だ。これは発行前何か月もの広告であり、決めかねる状況だったからに違いない。

写真1．上高地のウェストン碑前に立つ筆者
（撮影・中村純二先生＝東京大学名誉教授）

それとサブタイトルが現在の「登山と探検」ではなく、「探検と登山」となっている。原書のサブタイトルを忠実に訳すのであれば、これは逆になっており、だから、誤りといえば誤りになる。やはり、「登山と探検」とすべきだった。ただ、原書しかなかった時代のことだし、一般的にはサブタイトルを知るよしもなく、私はいたしかたない誤りだったと思う。

そして発行。「会報」三十二号（昭和九年一月）には、早くも新刊紹介欄のトップを飾り、長文で紹介された。筆者は木暮理太郎だ。一部をあげる。

「日本の登山界に取りて忘れ難い貴重なる文献として、最高位を占む可き『日本アルプスの登山と探検』一巻である。本書は明治二十九年に英国で出版されたので、今では容易く手に入れることは出来ないであらう。私は卅二年の頃上野の図書館で始めて之を発見して」

また「四六版三六一頁」と、先に不明だった頁数を正しく紹介。これも発行後だから、当然といえば当然だが、正確な情報だ。

広告はさらに「会報」三〇号（同年十一月）にも載り、「日本アルプス　登山と探検」と直り、定価も含め「四六判約四百頁写真二十五地図一定価二円五十銭送料二十一銭」とのくわしい記事となった。

この後も広告が載る。「会報」四十四号（昭和十年三月）や四十六号（同年五月）だ。ここには初の邦訳書を何としても知って欲しいとの出版社の心意気がしのばれる。

これ以降、広告は見られず、先の同年五月をもって最後だったことがわかる。

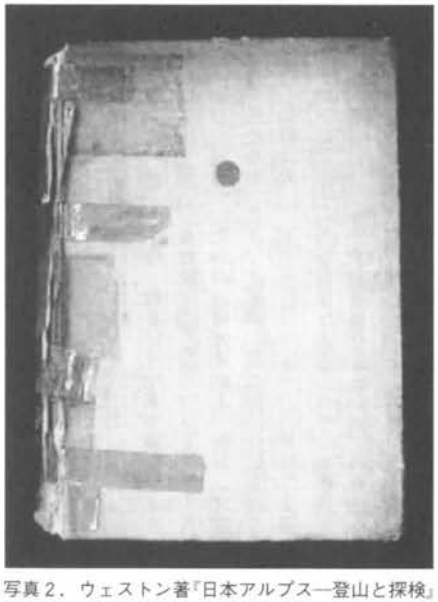

写真2．ウェストン著『日本アルプス―登山と探検』
1896（明治29）年発行（所蔵：大町山岳博物館）

（別記）引用文はすべて新字体・新かなづかいに書き改めた。なお、先人のお名前を敬称略とさせていただきました。

（日本山岳会資料委員）

山と博物館第45巻第11号
二〇〇〇年十一月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL〇二六一―二二―〇二一一
FAX〇二六一―二二―二二三三
印刷　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三二九三